

短報

面接場面における対人距離が面接者への好意度及び被面接者の自己開示, 感情に及ぼす影響

鈴木素子¹⁾ 保野孝弘²⁾ 島田 修²⁾

川崎医療福祉大学大学院 医療福祉学研究科 臨床心理学専攻¹⁾

川崎医療福祉大学 医療福祉学部 臨床心理学科²⁾

(平成8年5月22日受理)

The Effects of Interpersonal Distance on Liking, Self-disclosure and Mood in the Interview Situation

Motoko SUZUKI¹⁾, Takahiro HONO²⁾ and Osamu SHIMADA²⁾

¹⁾Graduate School of Kawasaki University of Medical Welfare

²⁾Department of Clinical Psychology

Kawasaki University of Medical Welfare

Kurashiki, 701-01, Japan

(Accepted May 22, 1996)

Key words : interpersonal distance, interview situation, liking, self-disclosure

はじめに

他人が近くにいるとその人の存在が気になり、落ちつかないことがある。相手はかなり遠くにいる時や、まだ相手が自分の存在に気づいていない時には、その人のことはほとんど気にならない。しかし、その人が近づいて来たり、知人であることがわかると、すぐに気持ちが動揺し始める場合がある。近くにいる他人が気になるのは、個人が持つ占有空間の中に他人が侵入しているためと考えられる。一般的に、この空間はパーソナルスペース (personal space) と言う¹⁾。これは、人がいつも持ち運んでいるという意味からポータブルテリトリー (portable-territory) とも呼ばれる²⁾。Sommer¹⁾は、パーソナルスペースは他人が侵入することがないように、

個人の身体を取り巻く目に見えない境界線で囲まれた領域であり、この領域に侵入しようとする者があると、強い情動反応が引き起こされると指摘した。自分のパーソナルスペースが保証されている時は快適であるが、この空間に他人が侵入すると不安になることが知られている。多くの人はパーソナルスペースを暗黙の緩衝帯として利用し、他人との人間関係を円滑にするようにしている。

渋谷³⁾は、ある人に被験者がどの程度近づいた時に心理的な動揺が起こるかを計測し、パーソナルスペースの大きさとその形を調べた。被験者は正面に立っている目標者に向かって直進し、「それ以上近づきたくない」、「不快を感じる」という位置で立ち止まり、その位置をパーソナルスペースの境界と考えた。その結果、パーソ

ナルスペースは後方に比べ前方に広い卵形をしており、大きな男女差が認められた。また、パーソナルスペースは伸縮性があり、個体要因や環境要因などによって影響を受け、その大きさを特定することは極めて難しい²⁾。

パーソナルスペースの大きさに影響を及ぼす個体要因として、男女差の他に不安特性が挙げられる⁴⁾⁵⁾。例えば、Patterson & Boles⁶⁾の研究によると、不安傾向の高い人ほど他人との間に大きなパーソナルスペースを持つ。不安の解釈が多義的なので、不安とパーソナルスペースとの関係を短絡的に説明することはできない。しかし、不安傾向の高い人は対人場面でも不安を強く感じる傾向があり、その不安を相手に知られたくない、その不安をさらに増大させたくないという思いが、パーソナルスペースを大きくしている可能性がある。このように、パーソナルスペースは、個人要因や対人関係などに応じて変化する。

Hall⁷⁾は、人間の行動は言語と空間行動という2つの文化に影響されていると考え、人にも対人間の心理的距離に対応した4つの物理的な距離帯があると指摘した。その第1は密接距離(0~45cm)である。これは他者と密着している距離で、親密な関係の距離である。第2は個体距離(45~120cm)である。これは会話の距離であり、個人的な親しい関係の距離である。第3は社会距離(120~360cm)である。これは会議などで用いられる、ビジネスの距離である。第4は公衆距離(360~750cm以上)である。これは演説などで用いられる、相手に個人を意識させない距離である。Hallの距離帯の考え方は、より親切でより私的なコミュニケーションを行う際には、相手に接近した距離を利用するというものである。つまり、2人の距離が近くなればなるほど、より好意的な関係があることを示すことになる。また、Mehrabian⁸⁾は、姿勢や動作、視線、相手との距離などに関する研究から、立ち話をする時、男性は相手の性別に関わりなく好きな相手に接近するが、女性は同性の好きな相手に対して、より接近した距離を取ることを見いだした。また、座って会話をする時は、性別に関係なく、話し相手も聞き手も好き

な相手に対してより接近した距離を取ることが明らかにした。その他にも、好意が相手との距離を小さくするという研究は多い。例えば、好意を持った者同士は密接な対人距離を取り⁹⁾¹⁰⁾、非好意に関連すると思われる特徴を持つ人には対人距離を大きく取ろうとする¹¹⁾¹²⁾。このことは、好意を持つ人には接近しやすいことを示していると考えられる。

一方、近くにいるだけで相手に良い印象を与えることができるという報告がある。Patterson & Sechrest¹³⁾は、60~240cmまでのいずれかの距離で、見知らぬ人同士で話をさせ、その後の相手の印象を評価させた結果、相手が遠くに座っていた場合ほど、話し相手は積極性に乏しいと評価した。つまり、聞き手が近くに座っている場合ほど、より積極的な人物とみなされやすいことを意味する。Kahn & McGaughey¹⁴⁾は、男性(あるいは女性)被験者に、その時初めて会った2人の男性(あるいは女性)と会話をさせた後、この2人の男性(女性)に対する好意度を尋ねた。この実験では、2人の男性(あるいは女性)は実験のためのサクラで、残りの一人が実験の被験者だった。2人のサクラのうち一方は、実験の被験者から50cm離れた位置に座り、他方は2.4m離れて座った。2人のサクラは反応の仕方が異ならないように統制されていた。被験者は、自分のすぐ近くに座っている人と遠く離れて座っている人の両方と同時に話しをしたことになる。その結果、異性の2人と話した時には、男女とも近くに座っていた人の方により高い好意を感じた。これらのことから、相手の近くにいることは単に好意を伝えるだけでなく、近くにいることで相手と親しくなり、相手に好意を持つ機会が多くなる場合があると考えられる。この現象は、好意を伝えるため相手に接近するという行動に比べ、普段はあまり意識されない。

従って、相手との距離と好意度との関係を調べることは、実生活や臨床場面での対人感情を理解するために非常に重要である。対人距離の差における心理的変化の関連性を明らかにすることは、非言語的コミュニケーションの臨床場面への応用にとっても有用であろう。

臨床場面での、対人距離の差によって心理状態がどのように変化するかを検討する場合、心理的变化により左右される自己開示の量を調べることも必要である。自己開示とは、他者が自覚し得るように自分自身をあらわにする行動を意味する¹⁵⁾。また、自己開示の量は、被開示者に対する好意度によって左右されると言われている¹⁶⁾。面接者との距離が好意度に影響を及ぼすのであれば、その好意度によって左右される自己開示の量も影響されると考えられる。また、対人距離が心理的变化に影響するならば、心理的变化を感情の変化にとらえた場合、具体的にはどのような感情に変化が認められるのか理解することも必要である。

本実験の目的は、面接場面を設定し、面接者と被面接者との対人距離の差が、面接者に対する被面接者の印象(好意度)、被面接者の面接中の自己開示量、面接後の感情状態にどのような影響を及ぼすのかを調べることであった。そのため、①被験者を面接者との距離が遠い群(遠群)、近い群(近群)の2群に分けた場合、面接後には近群の方が遠群よりも面接者に対して好意的な感情を抱く、②近群の方が遠群よりも面接者に対して好意的な感情を抱くのであれば、自己開示の量も遠群よりも近群の方が多いという仮説を立てた。

方 法

1. 実験場所

実験は、川崎医療福祉大学5F臨床心理学実習室内暗室(広さ3m×5.4m)で実施した。

2. 被験者

被験者は川崎学園の女子学生30名(平均年齢20.7歳)であった。和田¹⁷⁾の方法を参考に、被験者と面接者との距離が90cmの群15名(近群)と290cmの群15名(遠群)になるよう被験者を無作為に割り当てた。なお、この実験で女子学生のみを対象としたのは、性・年齢による個人差を統制すること、女性の方が男性よりも対人距離に影響されやすい²⁾ことを考慮したためである。被験者には実験についての説明を十分に行い、全被験者から実験に参加する同意を得た。その際、実験の真の目的は伝えず、「初対面の人との

面接がどのように進んでいくかをビデオにとって調べる」と説明した。

3. 面接者

面接者は、実験者が事前に依頼した男子学生1人(年齢24歳)で、被験者30人全てを面接した。面接者はこの実験の内容や仮説は知らなかった。実験中、全ての被験者に同じ態度がとれるように、事前に姿勢(まっすぐ)・視線(相手の目を見る)、返答の仕方(うなずき)を練習した。また、面接者は白衣を着用し、眼鏡をかけていた。

4. 測定内容

面接者に対する好意度、面接中の自己開示の量、及び感情状態、特性不安を測定した。

(1) 面接者に対する好意度

面接の開始前と後に、面接者に対する好意度を自作の質問紙で測定した。この質問紙の評価項目は、斉藤¹⁸⁾が示した好まれる性格を表す形容詞から「誠実な」、「思いやりのある」、「優しい」、「気さくな」、「寛容な」、「意欲的な」、「親しみやすい」、「あたたかい」、「信頼できる」、「好きな」の10項目を選出したものである。各項目について4段階で評価させた。

(2) 自己開示の量

面接者の質問に対して被験者が解答し始めるまでの時間(潜時)と被験者が発言している総時間(発言時間)及び自己開示の自己評価得点により、自己開示の量を測定した。面接中の被験者の様子をビデオに録画し、実験終了後、実験者が一人でビデオを見ながら、潜時と発言時間をストップウォッチで計測した。自己評価に用いた質問紙は、面接中の各質問項目ごとに自己開示の量を5段階評定で示すものであった。なお、ビデオ録画にはビデオカメラ(Panasonic ブレンビー)を、再生にはテレビモニター(Panasonic TH-20VS27)を用いた。

(3) 多面的感情状態尺度

両群の面接直後の感情状態の差を調べる目的から、多面的感情状態尺度¹⁹⁾を用いて測定した。この質問紙は、多面的な感情の状態を測定するための尺度である。

(4) 特性不安尺度

被験者の特性不安を STAI (State-Trait-

Anxiety Inventory)-II型²⁰⁾によって測定した。その質問紙のうち、特性不安 (Trait-Anxiety) を用いた。

5. 手 続 き

全被験者に対して、卒業研究のための面接実験であること、面接の後、質問紙に回答してもらうことを十分に説明し、実験に参加する同意を得た。実験日当日、所定の場所で被験者と待ち合わせ、実験の主な内容を説明した。この際、被験者に本実験の真の目的は告げず、「初対面の人との面接がどのように進んでいくのかをビデオにとって調べる」とだけ教示した。

被験者が待っている場所へ実験者が面接者を連れてゆき、面接者と被験者に、お互いに立ったままで自己紹介をしてもらった。これにより、被験者に自分の好む距離での自己紹介と、面接者の第一印象の測定ができるようにした。なお、この時の話題は、名前、学部、学科、学年、挨拶と決めておき、面接者の方から話し始めてもらった。その後、先に面接者が面接室に入室した。被験者は、面接者の第一印象を印象調査用紙に記入し、つづいて面接室に入室した。

面接室では、面接者と被験者は、各群の条件に従って所定の位置（お互いの距離が90cm, あるいは290cmの位置）に座ってもらった。そして、あらかじめ決められた話題（①好みのテレビ番組, ②高校の授業と比べて大学の講義, ③今までに経験した旅行, ④好ましくない自分の性格, ⑤最も落胆したこと, 悩んだこと, ⑥能力や体力についてのコンプレックス）について、面接者の質問に被験者が答えるという形で面接を実施した。被験者の発言時間・潜時を計測するため、面接中の被験者の様子をビデオカメラで撮影した。面接終了後、面接者は面接室を出て、入れ替わりに実験者が入室した。そして、被験者は多面的感情状態尺度、STAI-II型、自己開示調査用紙、印象調査用紙に回答した。完成後、本実験の真の目的と操作について被験者に説明し、お礼を述べて実験を終了した。全体の所要時間は、約30分であった。

6. 資料の整理法

録画したテープを再生し、実験者が一人でストップウォッチで発言時間と潜時を測定し、条

件別にそれぞれの平均値を求めた。自己開示の自己評価は、各項目とも「よく話せた」～「ほとんど話せなかった」の5段階評定の点数(0～4点)を加算して条件別に平均値を求めた。多面的感情状態尺度は、被験者の各状態尺度得点を、個々の項目の祖点(1～4点)を単純に合計して求め、条件別に平均値を求めた。印象調査のSD法は、1施行目、2施行目ともに4段階評定の点数(1～4点)を加算して条件別に平均値を求めた。特性不安尺度のSTAI-II型は岸本ら²⁰⁾の採点法に従って各項目の得点を合計して各被験者の不安得点を算出し、全体と条件別の平均値を求めた。

7. 統計処理の方法

2群間の平均値の差の検定には、対応のないt検定(両側検定;有意水準5%)を行った。この統計処理には、凡用統計パッケージPC版SAS(SASインスティテュートジャパン社)を用いた。

結 果

1. 特性不安の比較

パーソナルスペースの大きさに影響を及ぼすと言われる特性不安が、近群と遠群間に差がないことを確かめるために、両群間で特性不安得点の平均値を比較した。遠群が48.8点、近群が46.3点で両群間に差は認められなかった。よって、両群の特性不安には大きな差はないと言える。

2. 面接直前及び直後の面接者に対する好意度の比較

対人距離が相手に対する好意度に及ぼす影響を調べるために、面接直前及び直後における面接者に対する好意度を両群間で比較した。Table 1は、面接の直前と直後での面接者に対する好意度得点の平均値を示したものである。面接者との距離が遠い遠群では、面接の直前より直後での得点が低くなったが、近群では面接の直前

Table 1 面接者に対する好意度得点の変化

	面接前 (点)	面接後 (点)
遠 群	26.73	24.33
近 群	29.67	29.33

と直後間にはほとんど変化が見られなかった。そこで、面接の直前及び直後における好意度得点に2群間で有意な差があるかどうかを検定した結果、面接直前の好意度の平均値には2群間で有意な差は認められなかった。しかし、面接直後での近群の好意度の平均値は遠群に比べて有意に高かった($t=2.62$, $df=28$, $p<0.05$)。

3. 自己開示の量の比較

被験者と面接者との距離の違いが、自己開示に影響を及ぼしたかどうかを調べるため、自己開示の量を2群間で比較した。Table 2は、自己開示の量の指標として自己評定得点、潜時(sec)、発言時間(sec)の平均値を両群について示したものである。自己評定得点と発言時間は近群の方が多く、潜時は遠群の方が長い。それぞれの平均値について検定を行った結果、潜時の平均値には両群間で有意な差が見られた($t=3.11$, $df=22.2$, $p<0.01$)。しかし、平均自己評定得点と平均発言時間には有意差は見られなかった。

4. 多面的感情状態尺度得点の比較

面接者と被験者との距離が感情状態に及ぼす影響を調べるために、2群間の感情状態尺度得点の比較を行った。Fig. 1は、両群における多面的感情状態尺度得点の平均値を、下位尺度別に表したものである。Fig. 1を見ると、全体的に非活動的快や親和など快の感情得点は近群が

高く、不安や驚愕など不快な感情得点は遠群が高い。そこで、各尺度毎に2群間の差を検定した結果、抑鬱・不安尺度と倦怠尺度で遠群の平均得点が近群に比べて有意に高い傾向がみられた([倦怠] $t=1.76$, $df=28$, $p<0.05$, ; [抑鬱・不安] $t=2.04$, $df=28$, $p<0.05$)が他の尺度には有意差は認められなかった。

論 議

本実験は、面接場面を設定して、2者間(面接者と被面接者)の対人距離の差が、面接者に対する被面接者の印象(好意度)及び、被面接者の自己開示の量や面接後の感情状態にどのような影響を及ぼすかについて検討した。

面接者に対する好意度は、近群の方が遠群に比べて有意に高かった。つまり、近くにいる者は遠くにいる者よりも好印象をもたれやすいと考えられる。この結果は、見知らぬ2者と会話をする場合、近くにいる人の方により高い好意を感じるというKahn & McGaughey¹⁴⁾とも一致する。このことから、パーソナルスペースは単に好意を持つ者に対して縮小するだけでなく、周囲にいる者に対する印象にまで影響を及ぼすことが推察される。

Kahn & McGaughey¹⁴⁾は、近群の面接後の好意度は、同じ近群の面接前の好意度より高くなると報告した。しかし、本実験の結果では両群とも、面接前より面接後の好意度は高くはならず、従来の研究の結果とは一致しなかった。この結果は近群の被験者が、好意の返報性(reciprocity of liking)を受けることができなかったためと考えられる。つまり、人は自分に好意を持ってくれる人に好意を抱き、自分が好意を持った人に好意を持たれると、さらに相手に対する好意が増すという好意の相互交換的な傾向が知られている²¹⁾が、本実験では、単純に対人距離のみの影響を調べることを目的としていたため、面接者の態度を比較的無表情に統制した。具体的には、常に姿勢を正して被験者を見つめ、質問の返答にもただうなづくだけだった。そのため、面接後の被験者からの内省では、「面接中、こちらが質問に対して懸命に答えているにも関わらず、面接者の表情や態度が一定して変化が

Table 2 自己開示の量の2群別の平均値

	自己評定(点)	潜時(sec)	発言時間(sec)
遠群	12.73	53.00	130.72
近群	13.93	31.35	135.70

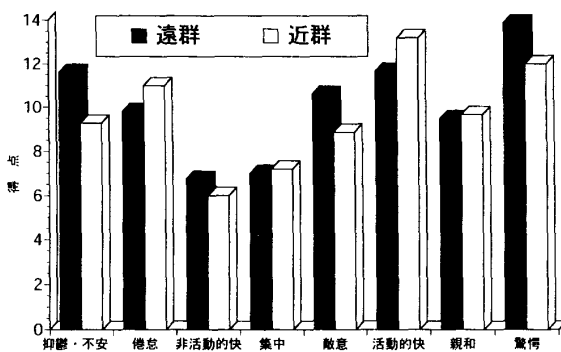


Fig. 1 多面的感情状態尺度の平均点の比較

なかったので冷たい印象を受けた」などと指摘する人が多かった。Schiffenbauer & Schiavoの研究²²⁾でも、ただ単に近くにいるだけで、好意的に評価されるとは限らないという結果が得られている。つまり、近くの席に座るということは、その人が自分に好意を持っているからだと思われやすい。一般的に、自分が好意を持っている人は、自分をやはり好意的に評価してくれるはずだと考えられている。しかし、その相手から好意的な評価を得られない時は、相手に対する好意は減ることはあっても増すことはない。このため、面接者の態度をもっと受容的で親密なものにすれば、近群の面接後の好意度は高くなったと考えられる。しかし、2群間の面接直前の面接者に対する好意度には有意差が認められなかったが、面接直後の面接者に対する好意度に有意差が現れたことは、面接者と被面接者の対人距離が面接者に対する被面接者の好意度に影響していたと考えられる。

近群と遠群の自己開示量を比較した結果、両群間に有意な差は認められなかった。本実験では、面接者と被面接者との距離が近い群の方が遠い群に比べて、面接者を好意的に評価するという結果が得られた。自己開示は、好意を抱いた者に対して、そうでない者よりも多くなされることが知られている²³⁾。つまり、面接者との距離が近い群の方が遠い群よりも多く自己開示をすると予想される。しかし、本実験では2群間の自己開示の量に有意差は見られなかった。これは、実験場面として面接場面を想定したため、普段の会話と異なり、被験者の意志とは関係なく面接者の質問に答えなければならないという義務感がはたらいたことが影響していると考えられる。

また、距離の差が自己開示の量ではなく、自己開示の内容に影響を与えていた可能性も考えられる。この実験で用いた近群、及び遠群の面接者との距離は90cmと290cmであった。Hall⁷⁾によれば、90cmは個体距離で、好意を持って個人的な関心事を話し合ったり、私的な交渉の際に用いられる距離であり、これは臨床的面接に適した距離であった。一方、290cmは社会距離にあたり、仕事上の話し合いなど、形式張った場合

の人間関係によく利用される距離であった。実験後の遠群の被験者の内省では、「入試時の面接のようで緊張した」という意見が多かった。つまり、近群に比べて遠群は、実際に感じている自己開示欲求に、「話したくなくても話さなくてはならない」という義務感をより多く感じていた可能性が考えられる。また、所定の位置にいるサクラにある事実について報告をする時、嘘の報告をする群と真実の報告をする群では、嘘の報告をする群の方がサクラとの距離を多くとるという研究報告がある²⁴⁾。これらのことから、本実験で2群間に自己開示の量には有意差が認められなかったが、その内容に差が認められる可能性がある。今後、自己開示の内容を含めて対人距離と自己開示の関係を検討する必要がある。

面接直後の感情状態を群間で比較した結果、抑鬱・不安尺度得点と倦怠尺度得点に有意な差が認められた。すなわち、面接者との距離が遠い群の方が近い群よりも、より不安感、倦怠感を感じていた。倦怠感については一般的にも、相手が近くに存在するよりも遠くに存在する方が緊張感が薄れ、倦怠感を感じやすくなることが予想される。一方、面接者との距離が遠い方が近いよりも不安感を抱く理由も説明できる。論議の自己開示についての部分でも述べた通り、本実験で利用した遠距離・近距離は、親しい会話をする距離と形式張った会話をする距離であった。面接場面という特殊場面においては、ただでも不安感を覚えるものだが、面接者との距離が遠く離れている状況では面接者との距離が近い場合より、会話をしていても孤独感を感じやすく被験者の不安感をあおる結果となったのではないかと考えられる。

本実験では、面接者と被面接者の対人距離が面接者に対する好意度や被面接者の自己開示の量、及び感情状態に与える影響を検討した。その結果、対人距離が相手に対する好意度に影響を及ぼすことは明らかとなったが、面接場面での自己開示の量については、対人距離の影響を明らかにすることはできなかった。しかし、対人距離の自己開示の内容に対する影響は予測がなされた。また、感情状態全体に対する対人距離の影響は認められなかった。今後は、対人距

離と他の非言語行動や座席位置との関連性も考慮に入れて検討することが望まれる。

文 献

- 1) Sommer R (1959) Studies in personal space. *Sociometry*, **22**, 247—260.
- 2) 渋谷昌三 (1990) I パーソナル・スペースの発見 人と人の快適距離 パーソナルスペースとは何か. 日本放送出版協会, 東京, pp20—23.
- 3) 渋谷昌三 (1985) パーソナルスペースの形態に関する一考察. 山梨医大紀要, **2**, 41—49.
- 4) 渋谷昌三 (1989) MAPS 人格投影法と顕在性不安検査 (MAS) の関連性. 山梨医大紀要, **6**, 29—33.
- 5) 田中政子 (1973) Personal space の異方的構造について. 教育心理学研究, **21**, 223—232.
- 6) Patterson A and Boles WE (1974) The effects of personal space variables upon approach and attitudes toward the other in a prisoner's dilemma game. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **1**, 346—367.
- 7) Hall ET (1966) *The hidden dimension*. New York: Doubleday. 日高敏隆, 佐藤伸行 (訳) 1970, かくれた次元. みすず書房, 東京.
- 8) Mehrabian A (1968) Inference of attitude from the posture, orientation and distance of communicator. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **32**, 296—308.
- 9) Byrne D, Ervin C and Lamberth J (1970) Continuity between the experimental study of attraction and real-the life computer dating. *Journal of Personality and Social Psychology*, **16**, 157—165.
- 10) Duke MP and Nowicki S (1972) A new measure and social-learning model for interpersonal distance. *Journal of Experimental Research in Personality*, **6**, 119—132.
- 11) Kleck RE, Buck PL, Goller WL, London RS, Pfeiffer JR and Vukcevid DP (1968) Effect of stigmatizing conditions on the use of personal space. *Psychological Reports*, **23**, 111—118.
- 12) Little KB, Ulehla ZJ and Henderson C (1968) Value congruence and interaction distance. *Journal of Social Psychology*, **75**, 249—253.
- 13) Patterson ML and Sechrest LB (1970) Interpersonal distance, and impression formation. *Journal of Personality*, **38**, 161—166.
- 14) Kahn A and McGauGHey TA (1977) Distance and liking: When moving close produces increased liking. *Sociometry*, **40**, 138—144.
- 15) Jourard SM and Lasakow P (1971) Some factors in self-disclosure. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **56**, 91—98.
- 16) 榎本博明 (1983) 対人関係を規定する要因としての自己開示研究. 心理学評論, **26**(2), 148—164.
- 17) 和田 実 (1988) 2 者間の好意, 対人距離および話題が非言語的行動におよぼす影響. 心理学研究, **59**, 45—52.
- 18) 斉藤 勇 (1985) 好きと嫌いの人間関係・対人感情の心理学入門. エイデル研究所, 東京.
- 19) 寺崎正治, 岸本陽一, 古賀愛人 (1992) 多面的感情尺度の作成. 心理学研究, **62**, 350—356.
- 20) 岸本陽一, 寺崎正治 (1986) 日本語版 State-Trait Anxiety Inventory の作成. 近畿大学教養部研究紀要, **17**(3), 1—14.
- 21) Berscheid E and Walster EH (1969) 峰屋良彦 (訳) 対人魅力の心理学. 誠信書房, 東京.
- 22) Schiffenbauer A and Schiavo RS (1976) Physical distance and attraction: An intensification effect. *Journal of Experimental Social Psychology*, **12**, 274—282.
- 23) Fitzgerald MP (1963) Self-disclosure and expressed self-esteem, social distance, and areas of self revealed. *Journal of Psychology*, **56**, 405—412.

- 24) 渋谷昌三(1990) V人つきあいの秘訣 人と人の快適距離 パーソナルスペースとは何か. 日本放送出版協会, 東京, pp130-132.